

主 題：救われた者への神の祝福 7

聖書箇所：ローマ人への手紙 5章9－11節

この間、第2次世界大戦においてアメリカに収監されていた日本人捕虜に親切に接した一人のアメリカ人女性の話を讀みました。ある収容所に病人への看護などいろいろと日本人捕虜に親切にしてくれる一人の女性がやって来て、1週間2週間と経過しても彼女のサービスには一点の邪意も認められなかったと言います。やがて、全員は次第に心打たれて「お嬢さん、どうしてそんなに親切にしてくださるのですか？」と彼女に尋ねたところ、彼女は初め返事を渋っていたのですが、皆が余りに問い詰めるので、やがてその重い口を開いてこのように答えたのです。「それは私の両親が日本軍によって殺されたからです。」と、その答えは耳を疑うものでした。自分の両親が日本軍によって殺されたから日本軍捕虜に対して親切にすると、それは想像も付かない答えでした。自分の両親を殺した日本人兵士を憎んで報復を考えても当然のはずですが、彼女は愛を示したのです。彼女はクリスチャンでした。そして、この彼女の証はこのことを後に帰還兵から聞いた淵田光男が救いへと導かれるきっかけになったと言います。この淵田こそあの真珠湾攻撃の隊長であり、後に連合艦隊の参謀となった人物です。憎まれて当然の者に対する愛、のろわれて当然の者に対する愛、これこそ主なる神の愛です。彼女はその主の愛を見事に実践したのです。

これまでパウロが私たちに教えてくれたこと、それは私たちが主の目にどのように映るかということでした。人ではなくあなたを造られた創造主なる神があなたをどのように見ておられるのか、そのことを私たちは正しく知っておかなければならないと、パウロは私たちに繰り返し教え続けてくれたのです。確かに、私たちが学んだことは、主なる神の目に映るあなたは、神の怒り、神ののろいを受けて当然の者であったということです。パウロは四つのことをもって、かつての私たちのことを説明していました。

(1) あなたは靈的に弱かったと言いました。つまり、主の前に正しいことが全くできない者だった、主が喜ばれることなど全く出来ない者だったのです。主が望んでおられる人になることも出来ないし、自分の罪がもたらす永遠のさばきから逃れることも、自分を虜にしている罪の力から逃れることも出来ない全く無力な者である。そして、自分で自分を変えることができない者、私たちがして来たことは神に逆らい続けることでした。

(2) あなたは不敬虔な者であったと教えました。6節「**私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。**」と。主に逆らい罪を犯し続けている者である。いつまで経っても創造主なる真の神を心から信じ心から愛し心から従って行こうとしない。いつまで経ってもこの方に対して謹み仕えようとしないう者だと言います。

(3) 8節で「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、**」と言いました。主を憎み、主に対して反抗的であった。創造主なる神があなたに望んでいることをあなたはしようとするのではなく、あなたは自分の思いのままに生きて来た、あなたは罪人であったと言います。

(4) 10節に「**もし敵であった私たちが、**」とあるように、あなたは神の敵であった、神の敵としてあなたは生きていたと言います。

これが神の目に映る本当のあなたの姿だと言うのです。そして、あなたはその様な姿であるだけでなく、このように神に逆らい続けて来た、神に背き続けて来た、神に対して罪に罪を重ねて来た者だと言います。ところが、そのようなあなたに対して主がなされたことは何だったのか？パウロは教えてくれました。それはあなたを愛してあなたのために救い主を送ってくださったと。7節にはこのように記されていました。「**正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があ**るいはいるでしょう。」、正しい人であれば、情け深く人々から愛されている人であれば、もしかすると、その人のために自分のいのちを犠牲にする人がいるかもしれない。でも、パウロはあなたはそのどちらにも属さないと言います。あなたは靈的に弱く、不敬虔で、罪人であり、神の敵であったと言います。神によって愛される資格の全くない者だったと。しかし、そのようなあなたのために、主は喜んでご自身のいのちを捨ててくださったと言うのです。パウロはここで、主の愛がいかに人間の愛とは比べものにならないかということ、比べようがないと、そのことを教えたのです。しかも、この愛は偶然ではありませんでした。神の計画に基づいたものだったのです。ですから、6節に「**定められた時に**」とあったのです。全て神のご計画だったと言うのです。

そして同時に、このイエス・キリストの犠牲、あの十字架の死は神の愛の証拠だったと言います。8節に「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、**」と、これは現在形です。あなたがずっと神に逆らい続けて

いた時に、あなたが罪の真っ只中にいた時に、あなたが神の前に喜ばれることを何一つしていない時に、もちろん、私たちには出来ないのですが、そのように罪の中を歩んでいた時に、神はあなたを愛してあなたのために救いを備えてくれたと言うのです。あなたが何かをしたからではないのです。神は一方的にあなたを愛して、あなたのためにこのような救いを備えてくれたのです。なぜ、その様なことを神はされたのでしょうか？神に逆らい神に背き続けている私たちのために、なぜ、神はこの様なすばらしい救いを備えてくれたのでしょうか？パウロは教えてくれました。「それがこの創造主なる真の神なのだ。これがこの方のご性質なのだ。私たちのような罪人をここまで愛してくださる、それがこの聖書の教える神、私たちをお造りになった唯一の神なのだ。」と。神があなたを愛されたのはいやいやではなかったのです。無理にそうさせたのではない、愛そうと一生懸命努力されたのではないのです。心からあなたを愛された、あなたの全ての罪を知った上で、あなたがこの神のために何を為して来たのか、また、何をなそうとするのか、その全てを知った上で神はあなたを愛してくれたのです。

Iヨハネ4：8-10「**愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。：9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。：10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**」、私たちが神を愛したから神が私を愛してくれたのではない、神に喜ばれることをしたから神があなたを愛してくれたのではない。神に逆らい続けて来たあなたに、また、神に逆らい続けること、罪を犯し続けることしかできないあなたのために、神はこの様なすばらしい愛をもって、あなたを愛しあなたに救いを備えてくれたと言います。クリスチャンの皆さん、私たちに必要なことは、このパウロが私たちに繰り返し教えてくれているように、このすばらしい神の恵みをしっかりと覚え続けることです。あなたはそのことを忘れていませんか？

先ほど、私たちが賛美した「アメージンググレース」を書いたジョン・ニュートンは、82歳で召されるまでの約60年間の信仰生活において、彼は彼の生活を完全に一変された神のあわれみとその恵みに対して決して驚きを失うことはなかったと言っています。ですから、この神のあわれみと神の恵みは彼のメッセージや文筆活動のテーマだったのです。彼は召される前にこのようなことを言っています。

「私は記憶をほとんど失った。しかし、私は次の二つを覚えている。それは私は最悪の罪人であり、キリストは最高の救い主であるということ。召されるまで彼はそのことを忘れていないのです。自分がどれ程罪深い者か、自分は救われる資格も価値も全くない者であると、そのことを覚えただけでなく、そのような自分を愛して救ってくださった神の恵みを忘れることがなかったのです。「驚くばかりの恵みなりき」と。どうですか、皆さん？あなたは今もあの救われた時の喜びを持って、感謝を持って、主のすばらしい救いの恵みを誉め称えていますか？「救われて良かった、救ってくださったことを感謝します」と、その様な感謝と喜びが今も変わらずあなたの心を支配していますか？その思いは成長していますか？それとも、それはもうすでに過去のことだと思っておられませんか？パウロはこの主の恵みをしっかりと覚え、その恵みを感謝し、そして、その恵みを誇っていました。この9-10節を今から見て行きますが、彼はここで主イエスが信仰者にすでにもたらされた祝福と、そして、後に約束されている祝福を述べています。クリスチャンはこんなにすばらしい祝福を神からいただいた、そして、こんなにすばらしい祝福が約束されていると、そのことを教えるのです。

☆クリスチャンに与えられた祝福

5：9-10「**ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。：10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。**」。この二つの節は非常に似通っています。9節には「**キリストの血によって義と認められた私たちが、**」とあり、10節では「**私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら**」とあります。9節「**彼によって神の怒りから救われるのは、**」10節「**彼のいのちによって救いにあずかるのは、**」。9節「**なおさらのことです。**」、10節にも「**なおさらのことです。**」と、構文上、この二つの節は平行しています。パウロは何を教えたかったのでしょうか？それは、主が信仰者に為された過去のみわざを教えた後、その事実に基づいて、未来の約束の確実性を述べているのです。神はもうすでにこのような祝福を与えてくださった、ゆえに、このような未来の祝福はあなたのものとされたということを教えるのです。9-10節には二つの神のみわざが書かれています。そして、その後、彼はそのみわざがどのような確信に満ちた希望をもたらすのか、そのことを話し、そして最後に、彼は神への感謝を記しています。このように三つの段階を経てこの手紙は記されています。

1. 神のみわざ

1) 義とされた 9節

神のみわざの一つ目は「**義としてくださったこと**」です。「**今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、**」と書かれています。これは法廷における話だということを思い出してください。法廷にあっ

て判事が「この人は無罪である」と宣告する、そのことを言っていると私たちはすでに学んで来ました。つまり、「**義と認められる**」ということは、主が主イエスを信じる者に対して「あなたは正しい、あなたは無罪である」と宣告される、法廷での行為のことなのです。その様に宣告されたのです。「この人は無罪だ。この人は正しい。」と。でも、決してこの人は罪を犯すことのない聖い正しい者になったと言っているのではないのです。だから、私たちは地上にあって、信仰者として罪との戦いを継続しています。この罪のからだから解放される日が後にやって来ます。義と認められたというのは、罪が全くなくなった、罪を犯さない者になったということではなくて、あなたも私もこの主なる神によって、「この人は聖い、正しい。」とその様に宣告されたということです。そのことをまずパウロは教えているのです。ですから、義と認められた人々にはすばらしい祝福が約束されています。それは、一つは私たちはこの神と永遠をともに過ごすという祝福です。同時に、私たちは神の約束されたさばきに会うことがないということです。そのことはしばらく後で学びます。そして、皆さん、この義とされるというのは一生に一回のことです。つまり、救いは主によって与えられたなら、絶対にそれを失うことがないということです。救われた人がその救いを失ってしまうということは、聖書の教えではありません。救われた人は永遠に救われているのです。

この9節、義と認められるために主は何をなさったのでしょうか？パウロはまた繰り返してそのことを教えようとしています。9節の初めに「**今すでにキリストの血によって**」とあります。私たちはもうすでにパウロの教えによって学んで来たのですが、もう一度パウロはここで「**血によって**」ということばを加えています。3章25節でそのことを見て来ました。「**神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。**」と記されていました。この「**血による**」の「**よる**」という前置詞は「方法、手段、媒介、また、代価、代償、犠牲」を意味するということは、もうすでに学びました。ですから、パウロがこの3：25で言ったことは、このイエス・キリストの身代わりの死という代価、代償、犠牲によって救いが備えられたということです。神が人の罪を赦すためにお定めになったことは、犠牲をもって、いけにえの血をもって、その人の罪を赦そうとすることです。ですから、旧約の時代から人々は自分の罪を赦していただくためにいけにえをささげ続けたのです。レビ記17：11にはこのように記されています。「**なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。**」、しかし、動物の血は私たち罪人の罪を完全に永遠にぬぐい去ることは出来なかったのです。そこで神が最高のいけにえを私たちのために送ってくださったのです。このイエス・キリストの血によって、キリストの犠牲的死によって、信じるすべての人の罪が完全に永遠に赦されるようになったのです。イエス・キリストという神のひとり子のいのちのその犠牲によって、信じるすべての人の罪が完全に永遠に赦されると。ですから、パウロはこの3：25でも「**キリスト・イエスを、その血による**」と言ったのです。イエス・キリストのいのちという犠牲をもって、信じる人のその罪が赦されると話し、この5：9でまたそのことを繰り返したのです。イエス・キリストのいけにえによって、イエス・キリストの死によって、身代わりの死によって、信じるすべての人々が義と認められる。神によって罪が赦されると言うのです。

私たちの罪を赦すことが出来るのは、この主イエス・キリストだけです。なぜなら、罪の赦しを得るためにささげられなければならないいけにえは、動物においても聖いものでなければならなかった、傷があってはならないのです。では、私たちの罪を赦すことが出来るいけにえも聖くなければならぬ。つまり、罪が全くないいけにえでなければならぬのです。そのような罪のない人間がこの地上には存在しないから、罪のない神が人となって来てくださって、私たちの身代わりに死んでくださったのです。このいけにえだけが、私たちを完全にその罪から赦すことが出来るのです。だから、ヨハネはこのように言いました。Iヨハネ2：2「**この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。**」、そこには人種の別も国籍の別もありません。すべての罪人のために、このキリストの血、このキリストの身代わりは有効なのです。イザヤ53章でもイザヤがおもしろいことを預言しています。イエス・キリストの十字架を預言しているこの53章で、10節「**しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。**」、「**彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。**」とは何のことでしょうか？救い主の十字架のことです。この救い主が自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、あなたの罪のためのいけにえとするなら、その救いを信じる者たちは彼の子孫となるのです。つまり、神の子どもとなるのです。だから、「**彼は末長く、子孫を見ることができ**」ると言います。イエス・キリストが備えてくださった救いによって、信じるすべての者は神の子どもとされたと、聖書がそのことを預言していました。そして、このキリストの備えてくれた完全な救いによって、あなたは義とされたと言うのです。主はすばらしいみわざを、すばらしい祝福を私たちに与えてくださったのです。この救いというすばらしい祝福を。

2) 和解させられた 10節

主のなさったことの二つ目は10節に出て来ます。「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、」と、今度は法廷の話から個人的な関係へと話が進んでいきます。創造主なる神と自分との関係です。パウロはここで「**和解させられた**」と語っています。このことばは「交換する」という意味です。10節には「**私たちは敵であった**」と語っています。でも、そのような私たちが神のあわれみによって、恵みによって「**和解させられた**」、赦されたと言うのです。かつての私たちは、もうすでに見て来たように、創造主なる神を信じない、その方を心から礼拝することもしない、心からその方に感謝もささげない、ローマ書1章にそのことは繰り返し教えられました。そこに私たち人間の問題があります。創造主がいるということは、私たち人間は分かっているが、その方を信じようとし、その方に従って行こうとし、その方を愛そうとしないのです。そして、その罪ゆえに罪人にはさばきが約束されているとローマ1：18、2：5に記されていました。人間は生まれながらに神の怒りを受ける者、神ののろいを受ける者、神のさばきを受ける者でした。しかし、そのような私たちと神は何を交換されたのでしょうか？ 私たちの罪と主ご自身の義を交換してくださった、敵意と友情を交換してくれたのです。そして、このように敵として生まれ、敵として生きて来た私のことを「友」と呼んでくださったのです。怒りを受けて、のろいを受けて当然の私に「正しい、この人は聖い」と宣告してくださった、これが神が信仰者一人ひとりのためになしてくださったことです。あなたは神と和解したのです。神からこのようなすばらしい祝福をいただいたのです。

そして、この「**義と認められる**」ことも「**和解させられた**」ことも、どちらも受け身です。私たちがそのようなことをしたのではなく、私たちは神によってそのようなことをされたのです。神が義としてくださったのです。神が和解してくださったのです。そのことをパウロはここで読者に明確に伝えようとするのです。これが神の為したこと、これが神のみわざだと、そのことを先ず最初に教えた後、そこからパウロは、それゆえに、私たちはすばらしい確信に満ち溢れた希望を持って今日を生きることが出来るのだと、そのように話に展開して行くのです。

2. 祝福を与えられた私たちにある希望とは？ 9-10節

1) 神の怒りから救われる

この9-10節を見ると、9節「**彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。**」、10節「**彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。**」と、どちらも救われるということを行っています。もう義と認められ、和解させられた人たちは「**救われた人たち**」です。それにもかかわらず、なお、「**救いにあずかる**」というのは、これから先のこと、未来のことを言っているのです。というのは、「**救われるのは**」という動詞は未来形だからです。ですから、私たちは明らかにこれは罪からの救いのことを言っているのではないことが分かるのです。先ほどからパウロが話していることは、イエスを信じた私たち、神の恵みによって救われた私たちは「**義とされ**」「**神と和解した**」、このような祝福をすでにいただいたということです。その事実に基づいている私たち信仰者は、未来を見た時にあるすばらしい確信に満ちた希望があるのです。それが「**神の怒りから救われる**」という希望なのです。つまり、ここで言われていることは、イエスを信じなかった者への最後のさばきのことです。その最後の審判から、私たちは確実に救われるということをパウロは言うのです。実は、パウロはこのことを繰り返しています。

例えば、同じローマ2：5には「**ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。**」とありました。つまり、まだイエスを信じていない人々は、罪に罪を重ね、神に逆らい続けているゆえに、自分の身に神の怒りを招く時がやって来ると言っているのです。同じ8節にも「**党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。**」とあり、このように神の前に罪を重ね、その救いを拒み続けている者には、神の怒りが下ると言います。そして、Iテサロニケ1：10にはこのように書かれています。「**また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。**」、「**やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださる**」と。同じIテサロニケ5：9にも「**神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあつて救いを得るようにお定めになったからです。**」と、私たちは神の御怒りに会うようには定められていないと言っているのです。もう一ヶ所、IIテサロニケ1：6-9を見てください。「**つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、：7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。：8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。：9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。**」もうお分かりになったでしょう。聖書には神に逆らい続けている者たち、この備えられている救いを

拒み続けている罪人に対して、厳しい神の審判があることを警告しています。それは「永遠の滅びの刑罰」であると言います。これが神の怒りなのです。神は罪に対して怒りをもたれます。聖い正しい怒りです。それは神が聖い正しい方だからです。しかし、今私たちはどのような罪でも神の恵みによって赦していただけます。でも、私たちがその赦しを拒み続けて行くなれば、私たちに待っているのは自分の犯した罪に対する神からの審判なのです。そのことをパウロは語ったのです。そこでこのローマ書5章で「**神の怒りから救われる**」、この救いに与っているあなたは、この罪の刑罰、永遠の刑罰から確実に救われる、あなたはもうさばかれることはないのだと教えるのです。イエス・キリストの十字架は、私たち罪人をその罪から解放し、赦し、救いを与えるのに十分です。しかし、そのイエス・キリストはそれで終わったではありません。その死から敢然とよみがえって今も生きておられます。この生きている神はあなたを永遠に守り続けることができる方です。

ジョン・マッカーサー先生はこのようなことを言われています。「もし、死なれた救い主が我々を神と和解させてくださるのなら、間違いなく、生きておられる救い主は、その和解を保ち続けてくださることが出来る。」と。信仰者の皆さん、心配しなくていいと言うのです。あなたが罪にさばかれること、罪に服することは絶対にないと言うのです。なぜでしょう？あなたはもう義とされたから、あなたはもう神と和解したから、この事実をしっかりと覚えるなら、希望を持って今日を生きることが出来るのです。

「私はもうさばきから解放された。永遠の滅びから私は永遠に解放された。」と。パウロはこの神の約束を疑っていません。非常に強い確信をもって彼はそれを信じています。懐疑心を抱いていないのです。だから、彼はこう言うのです。「**なおさらのことです**」と。「いっそう、ますます、さらになお」ということです。ですから、パウロが言っていることは「これまで私が語ってきたこの事実、この事実の通り、いやそれ以上に、私は大きな確信を持っている」と。それは「私は絶対にさばきに会わない！」という確信です。今現在、真実なることと比較して、未来において真実であることを彼は言っているのです。

例えば皆さん、いろいろなことを通して、私たちは神のみことばが真実であることを学んで行きます。その確信が私たちに大きな希望をもたらしてくれます。私が1975年から79年までアメリカにいたとき、私は神に頼って毎日の生活をしなければいけなかった。すべての必要を神にのみ頼って「神さま、どうぞこの必要に答えてください。なぜなら、あなたはピリピ人への手紙4章で約束された通り、必要を与えてくださる方だから」と。そして、その4年間の学生生活で神は間違いなく確実に、必要を全部満たして下さったのです。その時に私が確信したことは「神のみことばは真実である。神は約束されたことを必ず守られる。神は必ず必要を満たしてくださる。」です。これは私の強い確信です。揺るがない確信です。神が言われたその通りになることを、愚かな私に対して神はあわれみをもってその訓練を与えて下さったのです。そして、私は確信を持ったのです。神の約束は真実であると。その約束がこれからの歩みにおいて大きな希望をくれます。それは神はこれからも約束を満たして下さるという希望です。パウロが言っていることは、救われた私たち、この罪から救われて神の前に正しくされた私たちは、そのことを喜ぶだけでなく、将来を見て同じように、いや、それ以上の強い確信をもって希望をもって生きて行くことが出来るということです。救われた私はもう絶対にさばきに服することはない、そのことを喜びながら、そのことを感謝しながら彼は歩んだのです。

3. 神への感謝 11節

ですから、最後に11節で彼は神への感謝を述べています。「**そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせて下さった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。**」、この「**大いに喜んでいる**」というのには「誇っている、誇りとしている」という意味です。しかも、この動詞の形態を見ると、特に、ここでパウロが言いたかったことは「誇っている」という行動ではなく、だれが誇っているのかということ、誇っている人を強調したのです。つまり、彼が言いたかったのは、彼自身であり、彼と同じように救いに与った者たち、私たちがこの神のすばらしい恵みのみわざを心から誇っていると言うのです。「**誇っているのは私たちだ！**だれか人のことではなく、どこかで聞いた話ではなく、私たちがなのだ！」と、そのように強調したかったのです。なぜなら、それは自然のことだからです。神のすばらしい救いのみわざを覚えるときに、このような罪人をその罪から救い出さずして、神の前に正しい者として下さり、そして、神と和解させて下さった。この事実は「私はこれから自分の永遠を考える時に、さばきを恐れながら、もしかするとさばかれるのではないか、自分は永遠の地獄に行ってしまうのではないか？」というような恐れを抱くのではなく、確信を持って「私は主とともに永遠を過ごすのだ。その希望を持って今日生きることが出来る。」と言います。そのように生きている人々は間違いなく、その心から自然に、決して強制されてではなく、「神さま、ハレルヤ！こんな私を救って下さって感謝します。このような希望をくださって感謝します。このような約束をくださって感謝します。」と、神を称える者になって行くのです。

「神を感謝しなさい」と言われたから感謝するということと、神を感謝したいからと思って感謝する

ことは、違います。もし、私たち信仰者が、神が私たちのために為してくださったそのすばらしい救いのみわざをしっかりと覚えて、そして、私たちに与えられた祝福がどんなすばらしいものかを覚えた時に、あなたは間違いなくそのすばらしい祝福に対して、一どのような祝福もあなたに相応しくないものですが、「神さま、本当にありがとうございます！こんな私を救ってくださいって、こんな私にこのような祝福をくださって…！」と感謝が内側からあふれ出て来るはずですよ。どうですか、皆さん？あなたの心の中にそのような神への感謝が溢れていますか？神の恵みによって救われたことを喜んでおられますか？それとも、それはすでに過去の出来事なのではないでしょうか？どうすればいいの？神があなたのためにどんなことをしてくださったのかを覚えることです。そのために、あなたがどのような存在として神の目に映っているのかを知ることです。その本当の姿をしっかりと覚えることです。そして、この祝福をいただく資格の全くないあなたに、主はすばらしい「救い」というプレゼントをくださったのです。「私は死んでも生きるのです、主とともに。私の国籍はもう天にあります。私はこの方と永遠をともに出来るのです。私は神の恵みによって生まれ変わったのです。」と、この事実があなたの心を喜びに溢れさせているのでしょうか？パウロはそうでした。パウロは喜んでいました。パウロは感謝していました。だから、私たちのために和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいる、この方を大いに誇っていると言うのです。

先ほど賛美した「アメージンググレース」を作ったジョン・ニュートンは、こんなに愚かで哀れで、どうしようもない惨めな者を救ってくれた、そのことを覚えて感謝しています。今私たちが歌った日本語の歌詞にはこの歌詞は出て来ませんが、実は、7番があるのです。そこにはこのように記されています。

「我々が天国で一万年を過ごしたとき（明らかに比喻ですが）、そこは太陽のようにまばゆく輝いている。そして、神への賛美は我々が天国で最初に歌ったときからひとつも変わることがない。」と。皆さん、どう思いますか？先に話したように、救われてから約60年間、この救われた喜びを感謝し続けて生きた人物、その人が書いた曲です。それでいて真理です。皆さん、私たちは天国に行ってそれをするといいです。でも、私たちは天国民として今この地上に生きているのです。天国であることを今するのです。なぜなら、私たちは同じ祝福を神からいただいているからです。私たちは今この地上に天国民として生きているのです。では、なぜ、この神を心から称えることを今始めないのでしょうか？なぜ、天国に行くまで待っているのでしょうか？

私たちは永遠に終わることがないその時間をこの方を誉め称えながら過ごして行きます。なぜなら、この方はその称賛に値する唯一のお方だからです。私たちのような罪人を救い出してくださった唯一の方だからです。信仰者の皆さん、今からそのように生きるのです。主を心から誉め称え、主を心から賛美する者として、つまり、天国民として、救われたとして今から生きるのです。パウロがしたように。そして、多くの信仰の勇者たちがしたように。そのように思いませんか？神は間違いなく、私たちすべての賞賛に値する方であり、そして、値することをしてくださったお方だからです。そのようにして歩み続けてください。それがこのようなすばらしい祝福をくださった神に対して私たちが出来ることです。